

# 「映文連アワード2023」受賞主要作品紹介

## ■最優秀作品賞（グランプリ）

人知れず表現し続ける者たちⅣ （59分）

製作：プラネタフィルム株式会社／株式会社NHKエデュケーショナル／NHK

プロデューサー：村井晶子、牧野 望、鶴谷邦顕 プロデューサー・ディレクター・カメラマン  
：伊勢朋矢 編集：太田一生 作曲：ロケット・マツ

**【作品概要】**誰のためでもなく独創的な創作を続けるアーティストを記録したノーナレーションドキュメンタリー。自宅にこもり描き続ける男の「表現」と「生き様」を見つめる。西村一成が描き始めたのは19歳のとき。家族以外誰も見たことのない創作現場にディレクターが単身で入り込み、西村一成の1年を記録した。孤高の画家による圧倒的な表現は「アートとは何か?」「生きるとは?」と観ている者に問いかける。BS4K版。



**【選考経緯】**独創的な絵を描き続ける画家・西村一成氏の創作現場に伊勢朋矢ディレクターが単身で入り込み、個展までの1年間を記録したドキュメンタリー。西村氏は学生時代に初期分裂症を発病し、自分の内面をノートに書き記し、独学で絵画を制作してきた。その点数は膨大な数に及ぶ。取材対象をそのまま受け入れ、寄り添う伊勢ディレクターの距離感がよく、画家自身や家族（母親の純子さん）から率直な言葉を引き出し、愛猫・ちくらとの優しい日々を切り取った。形象や線、色彩が交錯し、「僕は怪獣」だとも言う西村氏の絵画を自然の中に置くと強烈な存在感を放つ。絵を描くことと、生きることが不可分に結びついた画家の日常から「アートとは何か」「人が生きるとは何か」を考えさせられる作品となった。

## ■文部科学大臣賞

### ノブさんからのメッセージ 手記に学ぶ関東大震災 (19分)

製作：株式会社桜映画社

クライアント：公益財団法人 東京防災救急協会

プロデューサー：山本孝行 脚本・ディレクター・編集：栗原龍一 カメラマン：今野聖輝、  
中井正義 アシスタントカメラマン：西島房宏 ビデオエンジニア：本間康彦 録音：藤林 繁  
照明：池田義郎 アシスタント照明：小岩 強 スタイリスト：岡本純子 ヘアメイク：面下伸  
一 音響効果：帆苺幸雄 音楽：大江拓二 アニメーション：アダチマサヒコ CG：トガシシ  
オリ 朗読：上野樹里

**映像概要：**日本史上最悪の自然災害と言われる関東大震災。10万人余りもの死者を出した大災害のなか、幼子2人を連れ生き延びた松本ノブさん。1923年9月1日のあの日、ノブさんは何を見、どう行動したのか。上野樹里さんの朗読と、アニメーションによる再現映像でノブさんの手記を読み解きながら関東大震災を追体験することで、日ごろの防災意識を高め、命を守る防災行動、共助の大切さを学ぶ映像である。



©桜映画社

**【選考経緯】** 関東大震災の時、東京墨田区で幼い二人の子を連れて生き延びた一人の女性・松本ノブさんが子どもたちのために書き残した手記（『大正大震災遭難之記』）を元にした防災啓発映像。ナビゲーターの上野樹里さんの語りと再現アニメーション、記録映像を巧緻に構成し、震災被害の恐ろしさをリアルに伝えている。猛火に襲われ、大混乱の中で奇跡的に生き延びた女性の言葉ゆえに震災の恐ろしさがより身近に感じられ、生きることへの意志の強さや冷静な判断が如何に命を守るか、また被災後の助け合い（共助）の大切さもよく伝わる。関東大震災から100年、首都直下地震が危惧されるなか、大地震が起きた時にどうすべきかを考える、防災意識を高め、防災行動に繋げるとても有用な映像といえよう。

## ■経済産業大臣賞

LIVE, BREATHE, EAT EEL : YAMADA NO UNAGI (18分37秒)

製作：株式会社鈴木企画

クライアント：山田水産株式会社

プロデューサー：鈴木雅人 ディレクター・カメラマン・編集：中川大己 録音：田村俊英

**映像概要：**日本初、一切薬を使用せずに、鰻の養殖を行う「無薬養鰻(むやくようまん)」を実現した水産加工食品メーカー「山田水産株式会社」。鹿児島県志布志市で丁寧に養殖された鰻を、自社工場で蒲焼きとして加工、日本で一番鰻の蒲焼きを生産している彼らのものづくりに対する熱意、品質の素晴らしさと、鰻の完全養殖への挑戦を描いた。当たり前のことを真剣にやる。「凡事徹底」こそが彼らのものづくりのすべてだった。



**【選考経緯】**鹿児島県志布志市で、薬を使用せずに鰻の養殖を行う水産加工食品メーカー・山田水産。養殖した鰻を自社工場で蒲焼きに加工する工程を見せつつ、味と品質を追求する社の理念をドキュメンタリータッチで映像化した。映像は美しく、製造される鰻の蒲焼きの美味しさを存分に伝えている。何より「無薬養鰻」にかける山田社長の姿勢が情熱的でエネルギーが溢れる。インタビューも巧みで、「当たり前のことをきちんとやる（凡事徹底）」など、モノづくりに対する言葉をうまく引き出して構成している。地方からでも魅力ある製品を生み出すことができることを力強く証明して見せてくれた映像である。

## ■優秀作品賞（準グランプリ）

### タングステン極細線 スترونワイヤー 「Respect for Spider」

（4分8秒）

製作：株式会社大広WEDO／株式会社ハット／パナソニック エレクトリックワークスクリエイツ  
株式会社

クライアント：パナソニック ライティングデバイス株式会社

企画：高橋翔子、吉岡由祐、畠山侑子、尾川達哉、花田光希 プロデューサー：嶋崎崇幸、渡邊雄介 ディレクター：豊泉誠志 プロダクションマネージャー：檜葉風太、磯野耕三 カメラマン：谷 詩文、岩本洋三 美術デザイン：石田裕一 ヘアメイク：糸井佑衣 編集：尾居士祐大 音響効果：高橋直樹 カラリスト：奥津春香 タイトルデザイン：平岡伸一 特殊造形：蓮沼千紘

**【作品概要】** クモの糸のように細く、しなやか、なのに強い「タングステン極細線ストロンワイヤー」を使いクモの巣を再現することに挑戦したプロジェクトを追う、ドキュメンタリー映像。ひとの手でクモの巣は編めるのか。果たしてクモはその巣に脚を踏み入れてくれるのか。今、パナソニックが挑む、前代未聞のチャレンジがはじまる。



**【選考経緯】** 白熱電球のフィラメントをつくる加工技術から生まれた「タングステン極細線 スترونワイヤー」は細く、しなやかでありながら、強さを兼ね備えた金属の繊維である。ニットアーティストの蓮沼千紘さんを起用し、ストロンワイヤーを用い、人の手で自然界最強の糸と言われるクモの巣を編んでいく。編んだ巣を実際のクモは受け入れてくれるかどうか、ドキュメンタリータッチで追い、開発者もドキドキしながら立ち会うことになる。アーティストの技術と金属の繊維の組み合わせに意外性があり、美しい映像でストロンワイヤーの秀逸さを実証的に伝えている。

## ■優秀作品賞（準グランプリ）

### 甦る宮家の肖像

幻のフィルム発見（44分50秒）

製作：株式会社毎日映画社

クライアント：株式会社BS-TBS

企画・プロデューサー：柿沼智史 プロデューサー：片山賢太郎、谷上栄一、辻井靖司 ディレクター：遠藤 奏、畑中将治 カメラマン：福原 豊、佐多恵之 録音：木全裕裕、浅山友基 音響効果：岩本圭介 脚本：田代 裕 編集：飯野美樹子、伊東修一 ナレーター：ホラン千秋

**映像概要：**現在東京都港区白金台にある東京都庭園美術館は、かつて戦前の宮家のひとつ「朝香宮家」の邸宅だった。美術館に残された当時の面影と今回発掘された朝香宮家の秘蔵フィルムを軸に、これまでほとんど知られることのなかった失われた宮家の暮らしを紹介している。



提供：東京都庭園美術館



**【選考経緯】**旧宮家のひとつ 朝香宮家の10時間に及ぶ秘蔵フィルムを入手し、今まで知られることがなかった戦前から戦中にかけての皇族の暮らしを明治天皇の孫娘・大給湛子さんの半生を軸に描いた作品。当時パリで流行していた最先端のアール・デコ様式を取り入れた旧朝香宮邸（現・東京都庭園美術館）の優美な室内装飾の数々。仏留学中の自動車事故という偶然がもたらしたものとはいえ、当時の皇族の芸術文化に対する熱意が理解できる。昭和5年、無邪気に踊っていた11歳の少女・湛子さんが成長し、結婚するのは昭和16年日米開戦の年。嫁入り仕度も慎ましやかなものになっていく。旧皇族の一人の女性が時代状況に翻弄されながらも感受性豊かに生きて行く姿が秘蔵フィルム、手記や和歌から伝わり、見応えのあるテレビ番組となった。

## ■優秀作品賞（準グランプリ）

### 最後の生活 （22分）

製作：渡邊高章

プロデューサー・ディレクター・脚本・録音・編集：渡邊高章 カメラマン・照明：アベトモユキ

【作品概要】 父を亡くしてから学校へ行かなくなった小学生の春陽の元に、母の兄である小説家の「おじさん」がやってきた。春陽とおじさんの心の交流を描いたある夏の物語。



【選考経緯】 父を亡くし、不登校になった小学生の春陽のもとに、母の兄である小説家のおじさんがやってくる。そのおじさんと春陽が心を通わせる物語。相手が小学生であっても丁寧な言葉を使い、対等に向き合ってくれるおじさんの存在、二人の距離感がとても良い。実際に不登校だった監督のご息が春陽を演じているが、リアリティがあり、子ども目線で捉えた脚本がよかった。朴訥な小説家のおじさんも存在感があり、じんわりと心に染み入る家族の物語となっている。但し、最後の大人になった春陽の結婚式のシーンは、時間経過の表現の仕方にもう少し工夫があってもよかったのではないかな。またタイトルは『ぼくの叔父さん』の方がしっくりくる。

## ■審査員特別賞

「はじめに遊びがあった」 ～ぴあの50年、これからの50年～  
ぴあ創業50周年記念ムービー （22分20秒）

製作：ぴあ株式会社

ディレクター：山岡信貴 スタッフ：林和男、小林覚、利重亜希 企画：ぴあ広報室 50周年企画室

【作品概要】【第一章】1972年、その歴史は、東京都中野区にある安アパートの六畳間から始まった。【第二章】携帯もインターネットもない時代、日本ではすでに「Twitter」が生まれていた。【第三章】1983年、「CATS」の開幕、「チケットぴあ」の誕生とともに日本のエンタメシーンが開花する。【第四章】出版、チケット、イベント企画、ホール運営、やがて”エンタメのバリューチェーン”へ。【第五章】これからは「心」の時代ー。私たちの理念は、「ひとりひとりが生き生きと」。



【選考経緯】創業50周年を機にぴあ50年の歩みを時代とともに振り返る記録映像。1972年中野区にある安アパートの六畳間から始まったぴあの歴史は、情報誌『ぴあ』の創刊、「ぴあフィルムフェスティバル（PFF）」の開催、「チケットぴあ」サービスの開始など、時代とともに変化し、様々な事業を展開してきた。映像にはユーミンの音楽「ひこうき雲」に乗せて、膨大な数の雑誌表紙や記録写真が使われているが、ある年代以上の誰しものが自分の人生と「ぴあ」との関係を重ね合わせて見てしまう懐かしい記録映像となっている。ぴあが日本のエンタテインメント業界を牽引してきたのは紛れもない事実であり、企業理念に貫かれた50年を振り返ることによって、ぴあの果たしてきた役割を一層鮮明に認識させることに成功した。ただ映像的にはもう少し工夫があってもよかった。

## ■審査員特別賞

まる (15分5秒)

製作：大久保美希／宮島遥夏(日本大学芸術学部)

プロデューサー・脚本：奈良原幸拓 ディレクター・脚本：大久保美希 ディレクター・カメラマン：宮島遥夏 照明：三浦果萌 録音：岡田陽香 編集：浅井博和 作曲：秋桜子 音楽MIX：なすひろし 美術：江木はるき

**【作品概要】** 主人公うさぎは幼少の頃に学校で出された「大人になった私へ」という作文が大人と呼ばれる今になっても書ききれていない。明日の私に、大人の私に、今のうさぎはなにを託すのか。昨日の私は、あの頃の私は、今になにを願ったのか。皆様の毎日と重なりますように、そんな15分間の映画。



**【選考経緯】** 主人公のうさぎは、幼少期に出された「大人になった私へ」という作文が書けなかった。そして、今でも書けないでいる。ゴミに塗れた生活からスッキリした生活へ、人生の塵を捨てるように片付けていく過程で自分を見つめ直す。小学校時代の通信簿『あゆみ』を手に取り、「なぜ大人にならないとだめなのですか？」の問いに「私は私のままでいいんだ」という答えを見いだす。正面を向いて、もう一人の自分に語りかけるようなモノローグ構成も斬新だし、脚本や撮影もうまい。ナイーブでエネルギー、作文を締める「。」から想起される成熟への物語を自分らしさに拘り、描き切った作品といえよう。